Annual Report 2015 - 2016

NPO法人 よこはま地域福祉研究センター

特定非営利活動法人
よこはま地域福祉研究センター
Yokohama Community development Reseach center

contents

3　目指すべき社会像・私たちの行動指針

4　TOPIX 2015ー2016　主な取り組み

7　2015年度を振り返って

10　vol.3 -vol.4 勉強会

13　障害者と家族の地域生活支援プロジェクト

17　社会教育・福祉啓発プロジェクト

18　こどもの地域生活支援プロジェクト

20　広報･制作プロジェクト

22　福祉サービス第三者評価・指定管理者第三者評価

24　委託〈横浜市〉地域ケアプラザ職員研修事業

27　委託〈新宿区〉 認証保育所の認可移行支援業務委託

28　委託〈神奈川県〉生活支援サービス担い手養成研修

30　2015年度　データ

31　団体概要／会員募集

目指すべき社会像
VISION

しあわせ（福祉）の実現のために、だれもが可能性を追求して止まない、やわらかな心と勇気に溢れる社会

私達の行動指針

NPO 法人よこはま地域福祉研究センターは、2012 年 10 月に設立。2013 年 4 月より事業を開始し、今年４年目を迎えました。これまでの 3 年間、私たちは、多様な事業を行ってきましたが、それらすべての事業の共通の目的は「人々の幸せの実現」でした。また、それぞれの事業は、私たちはもちろん、関係する人や組織の既存のあり方に捉われない、柔軟な発想とイノベーターであろうとする勇気でした。よって、これを行動指針とします。

1 **共通の目的・意欲・支えあいをモットーに！**
研究センターが一丸となって、事業を行うために、日々、確認、実行します。

2 **顔の見える関係づくりから　はじまる、はじめる！**
昨年までの私たちの理念。いつも、顔の見える関係が、取り組みの始まりです。

3 **対話・対話・対話！**
話す×聴く。内部でも外部でも広げます。

4 **人・もの・場　すべてエンパワー！**
新しいものを生み出すことにもこだわります。今ある存在の価値を高めることも大切にします。

5 **インクルーシブ（共生）へのこだわり！**
特定の人だけの社会ではありません。だれもの「しあわせ」にこだわります。

2015—2016 TOPIXS 主な取り組み

福祉サービス第三者評価事業

公立保育園と障害児入所施設の評価を行えたことが大きなステップアップとなりました。事業のフィールドのさらなる拡大を目指して東京都及び川崎市での評価機関認証申請を行い、28 年度より横浜市に加えて評価を実施できる運びとなりました。

(P22-23)

5/30 勉強会vol.3

地域社会でこどもを育むということ

NPO 法人よこはまチャイルドライン代表の徳丸のり子氏さんに以下のテーマでお話いただきました。

・家庭や地域におけるこどもと大人のあり方
・こどもの自ら考えるチカラを育てることの重要性
・こどもや子育て家庭と社会との関係

(P9)

7/25

肢体不自由児・者と家族のためのおでかけマインド発信マガジン「よこはまist。」創刊

(P21)

7/26-27

障害者と家族の地域生活支援プロジェクト

関東甲越地区肢体不自由特別支援学校PTA連合会　神奈川大会　一時ケア

(P19)

8/18～2016.2/24の間に5回

障害者と家族の地域生活支援プロジェクト

障害者の保護者のためのサロン

保護者のためのサロンでは、障害種別の垣根を超えた交流をすることができました。それは豊かな人生を育む土壌（社会）となり、互いに分かり合える社会につながることを意味していると考えています。

(P16)

11/16　12/4　1/25　2/1　2/19

こどもの地域生活支援プロジェクト

「地域でどう支える？こどものいる家族のくらし」

子ども・子育て支援に携わる専門職のスキルアップを目指し開催している「地域でどう支える？こどものいる家族のくらし」も、2 年度目の開催となりました。全 5 回の研修は様々な分野から講師をお招きし、多角的な視点からの学びの時間としました。

(P18-19)

2015.10～2016.5

広報・制作プロジェクト

川崎市社会福祉事業団　30周年記念誌

企画・取材・編集・デザイン

（※一部デザイン・DTPを除く）

協働制作：受注元　株式会社グローバルプリント　様

(P21)

2015

7月公開　広報・制作プロジェクト

全国肢体不自由児特別支援学校PTA 連合会ウェブサイトリニューアル

全国肢体不自由児特別支援学校 PTA 連合会ウェブサイトリニューアルに伴う、コンセプト設定、レイアウトデザイン、更新運営業務を受託しました。

http://zspi.jp/

(P20)

講座》7/17・28、11/5・19
サロン》9/16

社会教育・啓発プロジェクト・公募型男女共同参画事業

介護まるごと解剖講座

介護の分からないを分かるに変える市民向けの介護準備講座。近い将来の介護に不安のある方、介護予備軍でどのように準備したらいいか分からない方を対象に介護保険制度を理解し、自分仕様のサービスを選択できる力を養うことを目的にとしました。

(P17)

9/28〜1/18

障害者と家族の地域生活支援プロジェクト

障害福祉の専門職向け研修
「ゆるぎなく、前を向くワーカーになる」

理論編 3 回 + 実践編 2 回の 5 回研修を実施。理論編は選りすぐりのベテラン講師陣による熱い講義、実践編は「相談」・「経営」・「アート」から選べるコース制を初めて導入し、のべ 78 名の受講者の皆さんと新しい視点を探りました！

(P13-16)

7/8〜11/30

横浜市委託

横浜市地域ケアプラザ職員等養成
・地域活動交流コーディネーター向け
・地域包括支援センター職員向け
・職種間連携

横浜市地域福祉コーディネーターと地域包括支援センター職員、地域ケアプラザ所長の 5 職種を対象とした研修を実施するとともに、180 名の受講者を対象に「職種間連携」に関するアンケート調査をおこないました。

(P24-26)

新宿区認証保育所の認可化移行支援業務

東京都が独自に制定している「認証保育所」の「認可保育所」への移行を支援する本事業は、2 年度目となりました。支援対象施設も 6 施設増え、新宿区内の認証保育所全 22 施設のうち 17 施設を対象として実施。平成 28 年 4 月から 2 施設が認可保育所へ移行しました。

(P27)

2016.2/21　勉強会vol.4

ゆるめて分かる？若者リアル

若者の定義が、15 歳〜 39 歳になっている今、若者は何を考え、どんな自己実現をしようとしているのか？文字通り、色々な思考や視点が重ねながら、多彩なゲストとともに「若者の自己実現」について、収束を目的としないトークセッションを行いました。

(P10-12)

2016

地域社会の変化を見逃さない観察力をアイディアを集約するヒトの持つチカラを最大の財産に

創造性とイノベーションで今と未来に立ち向かう

超高齢社会において、地域生活の安心を生み出すために、福祉・医療・保健の連携が不可欠であることは、介護保険制度創設期から言われてきました。しかし、今日の社会は貧困問題をはじめとし、複合的な生活課題を持つ対象が広がり、深刻化しています。

これらの状況に背景に地域福祉を推進するためには、人口構造・経済・労働・教育など、福祉や医療の分野を超えた社会を掴むことに加え、過去の社会に併せて存在した意識や仕組みを変化させるアクションが必要になります。「何が問題で、どう解決するのか？」過去・現在・未来の社会について認識を深めることへの努力を怠ることなく、現場に関する観察力を研ぎ澄まし、創造性とイノベーションで未来に立ち向かいます。

機能的ネットワークの拡大・活用

これからの地域福祉推進のためには、既存の考え方・仕組み・システム・価値観に捉われない新しいアイディアとそれを実現させる実践力が必要になります。研究センターは、組織内部のネットワーク、また外部とのネットワークを事務職ひとり一人が常に意識して構築し、その拡大を図るとともに、ミッションの実現のために機能するネットワークとなるようマネジメントに努めます。これまで３年間も、多くの専門家や組織の方々に、時に、支えられ、時に協働関係をもって、事業を行い発展に繋げることができました。様々な分野で経験と実践を積み重ねた個人や組織が、互いが互いのチカラを必要とし、互いを活かしあう仕事をすることが、混沌とした地域社会に必要かつ、不可欠なことと考えます。

福祉推進のパートナーとして選ばれる組織づくり

地域福祉推進は、研究センターの自主事業のみでは実現できません。

研究センターは、地域福祉推進に資する様々な仕事を、クライエントから受け、共に実現に努力する組織でもあります。私たちが、地域社会における多様な取り組みを行う時に、パートナーとして選ばれる組織であることを目指した組織作りに努めます。

具体的には、信頼関係を築くための対話を第一とする組織であること。第二には、目的に遂行のための計画立案を示して取り組む組織であること。第三には、成果にこだわりを持つこと。

選ばれる組織であるための努力を重ねていきます。

2015年度を振り返って

代表理事より ご報告とご挨拶

理事長
豊田　宗裕
Munehiro Toyoda

＜経歴＞
聖徳大学・聖徳大学短期大学部心理・福祉学部 社会福祉学科　准教授
＜主な著書＞
「少子化と社会法の課題（共著）」法政大学出版会、「社会福祉の新潮流⑤地域福祉論（共著）」学文社／「地域福祉とソーシャルワーク実践／実践編（共編著）」樹村房／「地域包括ケアシステム構築に向けた相談支援体制のあり方に関する研究」星槎大学研究紀要第10号／「横浜市における地域福祉施策の展開過程にみるインフォーマルケア体制整備の考え方の変遷～市民参加による福祉のまちづくりに向けて～」コミュニティとソーシャルワーク　第4号など

「3年目は節目の年」と言いますが、当センターにとっても2015年度は「大きな節目の年」であったのではないかと思います。また、私自身にとっても、当センターとの出会いがあったこの年は、自身のこれからの歩みとして「大きな節目の年」となりました。

2015年度が始まり、様々なプロジェクトがこれから佳境を迎えていくという矢先に、前理事長の泉さんの訃報が突然飛び込んで参りました。泉さんとは横浜市の委員会や地元戸塚区での活動を通じて、これまで幾度となく様々なお話をさせて頂きましたが、余りにも突然の知らせに大きなショックを隠せませんでした。ちょうどその頃、研修プロジェクトへの参加のお声がけを頂き、研修の打ち合わせをする中で、法人運営のお手伝いについてもお誘いを受け、そのまま役員としてお仲間に入れて頂くことになりました。加えて右も左も解らぬままに、泉前理事長の後釜としての大役を仰せつかることにもなりました。自分でよろしいのか解らぬところですが、皆さんのお力を借りて、新しい取り組みを進めていければと考えております。

さて、近年の社会福祉課題は非常に幅広く、また複雑なものに拡大しており、様々な分野の知識と分野間の連携なしには効果的な問題解決には至らない（そもそも解決することが難しい）ものになっていると、実感しています。そんな中、特に地域福祉の視点から課題解決を考えた場合、その問題の根本がどのようなものであり、また何故そのような問題を引き起こしているのかを、その地域の環境や人間のつながりとともに考え、そこに積極的に関わっていくことが求められています。当センターがこれからの事業運営で大切にしなければならないのは、まさに、こうした様々な環境や人々との積極的な関わりや連携ということであり、どのように協働し事業を実施するか、方針を明確にしていくことではないかと思います。そのためにも、当センターの内外において、運営に関わる職員が、柔軟で、幅広い視点を絶えず持ち続けることが必要であり、事業のマネジメント力を高めていくことが一層必要とされるでしょう。

2016年度は、これまでの3年間の実績を踏まえて、新しい分野にも積極的に事業展開を図っていくと共に、社会貢献につながる実践を目指して参ります。皆様方のご支援を、重ねてお願い申しあげます。

センター長　副理事長
佐塚　玲子
Reiko Satsuka

1960 年生
慶応義塾大学卒
神奈川県立保健福祉大学
大学院修了

横浜市地域ケアプラザ職員、認定 NPO 市民セクターよこはまの勤務経験から地域福祉への関心を深める。2012 年特定非営利活動法人よこはま地域福祉研究センターを故泉一弘氏と設立。以来、センター長　副理事長として勤務

2015 年度を振り返って

代表理事より ご報告とご挨拶

設立３年目。８月５日、夏季休暇中だった私に、事務所から耳を疑う電話が・・・。

―泉さんがお亡くなりになったそうですー

何のことだか、目の前が真っ暗になるとはこういう時のことを言うのでしょう。しばらく、呆然としたことを今でも覚えています。

よこはま地域福祉研究センターは、泉理事長の尽力なしには、決して設立することはできませんでした。新しい組織が、何を目指し、どのような取り組みをしていくのか、設立当初５名の職員の想いに耳を傾け、時にはご自身の夢や可能性も語り、対話を重ねられました。また、事業開始準備に翻弄される私に、経営基盤づくりは、自分の役割とおっしゃって整備を着々と進めてくださいました。理事・職員誰もに、泉さんに支え見守られた３年間がありました。だからこそなのだと思います。「立ち止まってはいけない」「小さくても確実な歩みを続けなければ」「皆で力をあわせ誕生したばかりの研究センターを守ろう」と思うことができました。気を引き締め、下半期の仕事に向き合いました。

年度途中、副理事長から理事長に就任頂いた太田先生の存在も大きな支えとなりました。１年が終わり、事業収益は、昨年度より 18% あがり、事業内容も、自主・委託も含め新たな事業に挑戦することができました。泉理事長が残された、フラットな関係で対話を大切にする組織は健在です。京都の大学に赴任された太田先生は、理事にもどられ、私とは、15 年来、様々な仕事をご一緒したり、ご指導頂いた豊田宗裕先生が新たに理事長に就任してくださいました。理事・監事は、それぞれの強みや専門性を発揮し、個性豊かな職員たちは、それぞれの事業の開発と実践に日々努力を続けています。

また、新たな仕事に挑戦、病気療養などで３名の非常勤職員の退職がありましたが、２名の常勤職員を迎えて新年度のスタートを切ることになりました。「―しあわせ（福祉）の実現のために、可能性を追求して止まないやわらかな心と勇気に溢れる社会―」４年目を迎えるにあたって、あらためて、ビジョンを検討しました。文字通り、目指す目標に向かって進んでいきます。どうぞよろしくお願いいたします。

vol.3　地域社会でこどもを育むということ

勉強会

5 月 30 日（土）特定非営利活動法人　よこはま地域福祉研究センター総会と勉強会 vol.3 「地域社会で こどもを育む ということ」を実施しました。さまざまな分野の方にご参加いただいての活気あふれる勉強会となりました。

参加いただいた方:市民活動支援センター、社会福祉協議会、地区センター、学童保育、保育・高齢者等サービス事業所など職員、第三者評価調査員、子育て支援者の方など計 20 名

【第一部】　総会

会員の皆様と私たちの活動に興味をもってくださった皆様に向けて、理事長が決算報告書に基づき収支状況の説明を行いました。その後センター長がアニュアルレポートに添って昨年度の報告を行わせていただきました。NPO 法人の総会として、規則に基づき無事終了しました。私たちのありのままの現状と今後の展望をお伝えすることで、職員一人一人の頑張りを認めていただく貴重な機会ともなりました。

【第二部】　勉強会 & ワークショップ

NPO 法人 よこはまチャイルドライン代表　徳丸のり子氏さんにお話いただきました。

・家庭や地域におけるこどもと大人のあり方
・こどもの自ら考えるチカラを育てることの重要性
・こどもや子育て家庭と社会との関係

多くの経験・実践に基づいた徳丸さんのお話にこれからの生き方のヒントを感じることができました。

講義のあとは、グループに分かれて、ワールドカフェ。

普段接点の少ない人同士が肩を並べ、3 つのテーマに沿って自由に活発に意見交換を楽しみました。どんな意見が出たかというと・・・

①「こどもにまつわるワタシの心配」

貧困・母子家庭が増加／「その子のままで」いることができない／手をかけすぎている、全くかけていない／リーダーになれる子がいない／地域に高齢者と子どもしかいない／子どもが人から人の手を渡り歩くだけになっている／孫の居場所／相手がスマホ／職に就けるか？／このまま大人になって大丈夫か ?? ／挨拶ができない／リアルな恋愛に興味がない等

②「こどもが持っている“チカラ”って？」

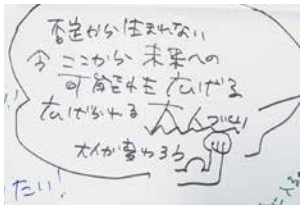
びっくりする力／ 0 歳児は集中力が最大／大人からみると宝物／発想力、創造力／ワクワクする力／認められると、次のチャレンジができる／甘える力、人に頼れる力

③「地域社会で何が必要？何ができる？」

おせっかいおばちゃんになる／声かけ、見守り、うるさいおじちゃんおばちゃんに／コンビニの活用・コミュニケーションの場に／親や大人が子供と一緒に地域に出る／ IT の力の活用／ IT に強い子どもの力を伸ばす／小さなきっかけを作れる大人に／コーディネーターの必要性？／親以外のほめてくれる大人に／子どもを人として認める／子どもの自信につながる／大人の未来を明るくする／大人が「ヘルプミー」といえる状況を作る

顕在化しづらい「子どもの危機」に敏感になり、子ども自身の声を聴き、今ある支援とニーズとの「ズレ」を調整していくこと。徳丸さんのお話を各現場での実践につなげるためのヒントを、話し合いの中で確認する時間になりました。

勉強会は、参加者の皆さん、私たちが「顔の見える関係」をより広げるチャンスでもあります。今回も大いに語り合い、ここで生まれたつながり、化学反応の体験を今後に活かしたいとの声も頂きました。



トークセッション＆ミニライブ

vol.4　ゆるめて分かる？若者リアル

よこはま地域福祉研究センターの４回目の勉強会を、2月21（日）横浜市栄区の地球市民プラザで開催しました。今回の勉強会は、、現代社会の「若者」にスポットをあてて行うことにしました。若者の定義が、15歳～39歳になっている今、若者は何を考え、どんな自己実現をしようとしているのか？文字通り、色々な思考や視点が重ねながら、多彩なゲストとともに「若者の自己実現」について、収束を目的としないトークセッションを行いました。参加メンバーは、佐塚玲子（当センター長）、若新雄純氏（コミュニケーション・プロデューサー）、矢野マイケル氏（YANO BROTHERS）、矢野デイビット氏（YANO BROTHERS）、渡部達也氏（若者の居場所づくり）、脇田英津子氏（株式会社　博報堂　こそだて家族研究所）、田口 努氏（横浜 YMCA　総主事）。

オープニングロール「Did you know？」2.0

まずは、１０年前にカナダの大学教授と学生が作成した動画の上映です。成功とは？幸せとは？　グローバルな視点での事実や、未来について「Did you know？」あなたは知っていますか？・・・と問いかけています。

ミニライブ

幼少期に要保護児童としての経験を経て、自己実現を果たし、それぞれの仕事をもちつつ、兄弟でミュージシャンとして活動をするYANO BROTHERSのミニライブです。（この日は、弟のサンシローさんは薬剤師試験のため、お休みでした。）「日本」と「アフリカ」をブレンドした“JAFRICAN”と呼ばれる独自の世界観を持つ音楽ジャンルを切り拓き、圧倒的な声量、天性の声、兄弟ならではのハーモニーに、二人の熱いハートが、直に伝わってくるライブでした。

トークセッション感想

・自己実現＝何ものかになるのではない。親が生きてきた環境と、子ども達の生きる環境は違う。
・若者がこれからどう生きていくか、いろいろな立場から考えると、こんなにも考え方が違うのかと思った。
・自分自身が「～になろう」「～にならなきゃ」という考えに囚われていたかもしれないと感じた。
・「出会いが、人生を加速させる」という言葉がとても共感できました。私の座右の銘にしたい。
・「じゃあ自己実現（自己実際）にはどうしたら良いのか」というところまで議論をもっていって欲しかったが、とても有意義な考えさせる場だった。
・今自分が一人の人間としてどうなりたいか、生きていくのが自分らしいのか迷っている途中。れから先、様々な人と関わりを持ち、影響を受け与えることの出来る人になりたい。

対話の時間

再度ゲストの方に登場いただき、会場からのゲストへの質問に、時間の許す限り答えていただきました。「あるがままの自分であるためには？」という質問に環境からの機会や影響、恐れずに自分と向き合うこと、世代を超えて人の意見を聞くことなど各自の立場から意見を述べていただきました。一緒に深く考え、悩んだり、理解したり、考えたりした質問、意見を寄せて下さった参加者の皆さんのお力により、熱い交流の時間となりました。

今回の大きな気づきとしては、「支援する側」「される側」の関係性からの脱却がまず必要ということ。そして自己の葛藤とも向き合うことが重要であること。情報化、パーソナル化が進む中、社会で、地域で何が起こっているのか？を、老いも若きも正しくとらえ、一緒に考えることがより大切、ということでした。

参加者 Voice

**“出会いが人生を加速する”
センターにはそんな出会いが
たくさんある。**

新井　仁子さん

私は、センターとは、市民セクターよこはま時代からの長い付き合いです。市民セクターよこはまから分離し、活動をスタートした時から、“横浜市の福祉の顔”のような錚々たる面々が会員になっていることを知り、センターの底力を実感しました。センターのその後の活動は、福祉に留まらず、見ているだけでワクワクします。今回の勉強会に参加し、さらにその思いに確信が持てました。

若新　雄純さんの「なぜ若者は人と関わろうとしないのか？」との質問に「大人から求められるから嫌なんだ。」とキッパリ回答。“大人”のあり方を突き付けられました。また、元公務員を38歳で退職し、「冒険遊び場たごっこパーク」、「子どものたまり場おもしろ荘」、「子ども若者シェアハウスむすびめ」等を運営している渡部　達也さん。家庭では荒れていた子が、渡部さん夫婦のもとで社会とのつながりを回復していく映像は、感動。この感動的な仕事の年収は、なんと150万円。うーん・・・。センターは、出会いの場なんだ、だからワクワクするんだ、と思った次第。是非、研究センターの存在を多くの人にもっと知ってもらいたい。私が感じるようなワクワク感を、もっともっとたくさんの人と分かち合いたい。その先に、私たち皆が、幸せな社会が見えてくると思うから！

vol.4 ゆるめて分かる？若者リアル

出演者 Voice

みんなで一緒に悩み、考えていくべき「現象」として、それに付き合っていくことが気づきになる。

若新　雄純さん
コミュニケーション・プロデューサー

貴重な機会をいただき、ありがとうございました。

勉強会に参加させていただいてまず気づいたことは、会場に「一次当事者」がほとんどいなかった、ということです。つまり、就職や働き方に悩んでいる若者本人ではなく、その親御さんや支援機関の関係者の方がほとんどでした。これは、今回の勉強会だけではなく、日本各地のさまざまな場所で同じように起きていることだと思います。このような議論の場所に、悩みや問題を抱えている本人はなかなか出てきてくれない。こうなると、どうしても「支援者目線」での議論となってしまい、当の本人たちが抱える想いや複雑な感情などは「予測」のまま膨れ上がっていってしまいます。そして、その問題はなぜ起きたのか、どうすれば解決できるのか？といった「問題解決」のための議論が当事者不在のままどんどん進んでしまい、一方的に「問題」であると認定された本人たちと支援者たちとの間には、大きな溝が生まれてしまうのだと思います。「問題」は、正しく設定されなければ解決されません。物理のテストで出題されるような、「ただし空気抵抗や摩擦は考えない」というリアリティに欠けた状態で問題を問いても、それが有効に使えるわけがありません。そして、今回議論されたようなテーマについては、「問題」を正確に把握するというようなことは不可能ではないか、と感じています。なぜなら、支援者たちが「問題」であると扱っている当事者たち自身ですら、なぜ今そのような状況にあり悩みや苦しみにぶつかっているのかなどを、はっきりと説明などできないからです。それくらい、今の社会に起こっている諸問題は、簡単に答えや解決策が導けるようなものではない、ややこしいものなのだと思います。

勉強会当日にも少しお話ししましたが、僕はこのようなテーマは「問題」ではなく「現象」として扱っていくことがいいのではないか？と考えています。ひきこもり問題ではなく、ひきこもり現象。失業問題ではなく、失業現象。なんでもかんでも問題だと一方的に決めつけるのではなく、みんなで一緒に悩み考えていくべき「現象」として、それに付き合っていく。そうすれば、「解決」ではなく新しいスタイルとして「発展」していく場合もあるかもしれないし、全く別のところに問題があった、ということに気づくかもしれません。あるいは、解決すべき問題ではなく、ただの現象として周りの人たちが付き合っていくことができるようになれば、本人たちにとってはそれだけで物事が良い方向に進むかもしれません。「問題」を「解決」する「支援者」が、「現象」と「共存」する「仲間たち」に変わっていく。もしかしたら、そんな新しい社会の作り方もあるのかもしれません。

若者と大人の本音をフラットに言い合える機会を意識的に作っていくことが必要。

矢野　デイビットさん
YANO BROTHERS

今回のトークセッションに参加させて頂いて、若者の本音と大人の苦しい本音を知ることができた気がする。会場に参加した人の多くが、「若者の自立について」、自分が感じていることと、他の誰かが感じていることの違いに気づき、驚いたのではないだろうか。

人や人の考えが皆同じである必要はないし、それでいいんだと思う。ただ、世界は、沢山の大切なことで溢れていて、人、ひとりが理解していることなんて、その中のほんの一部。他者の考えや想いを知ることが、とても大切な瞬間になることもあるんだと思う。時には、別の考えや想いに触れて、これまで、自分が信じていたことに疑いをもって、迷いに入ってしまうこともあるかもしれない。僕にとっても、今回、それがあった。でも、それも新しい価値観との出会いで、今後、掘り下げて考えていくことだと感じている。理想はエネルギーになるけれど、社会に切実に求められることを実現するには、様々な人の、小さな気づきの積み重ねが必要なんじゃないかと思う。僕自身、大きな理想を語るのではなく、小さな気づきや、それを他者と分かち合える人間でありたいと思う。

今回、様々な人が集って、みんなの考えや想いを共有し、沢山の財産が分かちあえた。世代を超えて、こんな風にシェアする機会が、もっと増えたら、もっと沢山の方たちと分かちあうことができそうだ。現代の大人は、子どもや若者にとって矛盾な存在に写っているのかもしれない。「のびのび、好きなように生きていいよ」と言う大人がいるけれど、実際に社会に出ると、「失敗は許されない」って指導されたり、「余計なチャレンジをしないで現状維持」を促されたりする。僕が、ある大学の若者の自立を考えるプログラムに関わった時、社会に出るときの選択の自由が、若者にプレッシャー与えていることを知った。大人が若者を導こうとする方向と、実社会の在り方が乖離していることを知り、自立しようとする若者の苦悩を知った。この大きなズレは縮める必要がある。それには、若者と大人の本音をフラットに言い合える場所というか機会を意識的に作っていくことが必要なんだと思う。それは互いに学び合う場所になるはず。僕は学ぼうとする大人でありたい。他の誰かの当たり前を知る、勇気と心の柔らかさを持っていたいと、今日、改めて感じた。

障害者権利条約時代をリードする ワーカーの専門性とは

障害福祉ワーカー向け研修

ゆるぎなく、前を向くワーカーになる

地域作業所、就労支援事業所、相談支援事業所など、障害福祉現場のワーカーの皆さんが、共生社会を見据えた効果的な実践を行うために必要な「知識」「スキル」「マインド」を身につけられるよう企画しています。これまで、魅力的な自主製品開発の方法や、マーケティング手法などを学ぶことにより、職員の専門性をレベルアップするとともに、障害者の社会化や地位の向上、工賃アップなどを実現することを目的としてきました。

変化する社会の中で、より多様な現場のニーズにマッチしたものとするため、連続研修の前半を理論編、後半を実践編とし、実践編は 3 つのコースから選択できるようにしました。

研修タイトルに込めた願い

PJ 事業を通じて現場の生の声を聞くなかで、職員の「現状を変えたい！」「新しいものを生み出したい！」という熱意の前に、どうやら大きな壁、様々なつまずきが、障害福祉の現場には存在するらしい、ということが見えてきました。そんな中、難しい障害者支援の現場に立ち、何だか足元がぐらついて、不安になっている人が多そうだな…というのが、研修タイトルを「ゆるぎなく～」と命名した理由です。ならば改めて、立ち位置、立ち方を確認し「前進する」ために、大切な事は何かを認識したい。施設・障害種別、職種などを超えて、障害者福祉に関わるすべての「ワーカー」が持つべき根本的な考え方、実践の根拠となる「理念」「概念」を今一度とらえなおしたい。という思いが PJ 担当の中に強くありました。

魅力的な講師陣との出会い

そこで、「理論編」の設定と講師を考えていた時、遠く九州で運命的な出会いがありました。熊本県山鹿市で多様な福祉事業をおこなう社会福祉法人愛隣園の三浦貴子さん。広報 PJ 事業「しぴれん」WEB ページの取材で、施設を訪問し、三浦さんの法人代表としての「ゆるぎない理念」をお聞きすることができたのです。それは、法人特有のルールではなく、すべてのワーカーの基本姿勢をつくるバイブルともいえる「障害者権利条約」を丁寧に理解し、実際の支援に反映させるという、シンプルかつ力強いものでした。さらに、当事者であり研究者、政策提言のフロントランナーでもある、東俊裕さんを三浦さんからご紹介いただいたこと。昨今の重要なキーワードである「差別解消」「合理的配慮」等について、障害者の雇用・就労の観点から長年研究されてきた、松為信雄先生ともつながることができ、ゾクゾクするほど贅沢な講師陣による理論編 3 回を組み立てることができました。

獲得できた？ワーカーとしての誇り

研修タイトルに込めたとおり、この研修で受講者の皆さんに獲得してもらいたかったのは、「障害福祉ワーカーとしての誇り」。「障害者権利条約」という世界基準で障害福祉はある意味制約され、一方でその質を約束されるべきもの。その最前線に立つ皆さんに、胸を張って、もっと面白がって、仕事に取り組んでもらいたいと感じました。理論編の参加者は毎回 10 名前後だったものの、特に連続参加の方の表情が回を追うごとに明るく、前のめりに講義から学び取り、ワークでは能動的に意見を交わし合う様子が見られました。今後の活躍が楽しみな、新人や若手の方が多かったのも 2015 年の特徴でした。

マクロを学んだうえでのノウハウ獲得

理論編に続いての実践編の中では、今回初めて「相談援助コース」を設定。ここでも、横浜市リハビリテーションセンターの小田さんとの出会いがありました。現任者であり講師としても全国的に活躍されている小田さんは、「相談援助技術の基本を押さえたうえでの、地域支援を意識した個別支援の実践」、という難しいオーダーに頭を抱えながらも、対人援助

の実力を向上させたい受講者のニーズに応え、実践上の不安を確実に受け止め、エンパワメントしてくださいました。

毎回好評をいただいている「経営」「商品開発」のテーマも、今回は別々にコースを設定。作業所や就労支援事業所からだけでなく、特例子会社、広告会社、デベロッパー、ギャラリー経営など様々なジャンルの方にご参加いただき、盛況かつ予期せぬような化学反応が絶えない、満足度の高いプログラムとなりました。

この先、もっと面白く（しぶとく）

「インクルーシブ」という言葉が飛び交い、「どうやって混ぜればいいのか」「格差をなくす援助とは？」などに悩む支援者が世の中にあふれています。一方で、今後より加速する超高齢・人口減少社会にあって、「障害」や「格差」は市民生活の中で、案外顕在化しやすいものとなっていく可能性があります。そこで必要となるのは、「残念ながら、差はなくならない」という開き直りと、「障害者の面白いところ」をとらえ、むしろそれをエネルギーに変えるような、柔らかい発想ではないでしょうか。これからの時代、知識やノウハウとともに、そんなふうに物事を全く違った方向性から眺めるような、「センス」が問われることを皆さんと共有し、トレーニングの機会も作りたいと思っています。

2015 年は全 9 回研修としたことで、計画段階から実施、報告までのプロセスの中で、たくさんの人との関係を構築することができました。これまでの研修や保護者サロン、肢 P 連事業などを加えると、より多く様々な人たちとのつながりの蓄積があります。このつながりを活かすべく、2016 年は過去に関わって下さった皆さん、新たに加わる皆さんの「出会いと科学反応の機会」も作っていきたいと思います。

実施概要

理論編

01

「共生社会と障害」
日程 ： 9月28日（月） 13:00-17:00
会場 ： ウィリング横浜
講師 ： 熊本学園大学教授・弁護士・
元内閣府障害者制度改革
担当室長　東　俊裕氏

02

**「障害者権利条約時代の
障害福祉サービスのありかた」**
日程 ：10月13日（火）13:00-17:00
会場 ： 横浜情報文化センター
講師 ： 障害者支援施設 愛隣館館長 ・
内閣府障害者政策委員会
委員長代理　三浦 貴子氏

03

「地域生活 ・ 就労と障害」
日程 ：11月17日（火）13:00-17:00
会場 ： 横浜情報文化センター
講師 ： 文京学院大学人間学部
教授　松為　信雄氏

実践編

相談コース

04

**障害者の尊厳に寄り添う
相談支援のスキル**
個別支援と地域支援の統合
日程 ： 12月18日（金）
会場 ： ウィリング横浜
講師 ： 横浜市総合リハビリテーションセンター
小田 芳幸氏

05

社会資源の活用と開発
日程 ： 28年1月8日（金）
会場 ： ウィリング横浜
講師 ： 横浜市総合リハビリテーションセンター
小田 芳幸氏

経営コース

04

**インクルーシブ社会創出のため
の商売ノウハウ**
経営 ・ マーケティング編
日程 ： 11月25日（水）
会場 ： ウィリング横浜
講師 ： 中小企業診断士　為崎　緑氏

05

店舗プロデュース編
日程 ： 28年1月18日（月）
現場診断バスツアー
講師 ： 飲食店舗プロデューサー ・ 二級建築士
水谷 功氏

商品開発コース

04

アートと障害
社会性を促進する表現活動
日程 ： 12月9日（水）
会場 ： ウィリング横浜
講師 ： 美術家、アートディレクター
中津川 浩章氏

05

障害者の強みを活かした魅力ある商品開発
日程 ： 28年1月13日（水）
会場 ： ウィリング横浜
講師 ： con*tio （コンティオ）
山口 里佳氏、杉 千種氏